

7  
時半の男

## 梗概

工場で働く鍋島史也（30）は奇妙な腕時計を手に入れる。時計の力によって史也は毎晩7時半になると世界の時間が止まる現象――正確には7時半の1秒間で24時間を体感できる摩訶不思議な力を手にする。

史也は力を悪用し空き巣を繰り返す。犯行時刻が必ず7時半であることから『7時半の男』と呼ばれるようになる。

ある日、史也はプロ野球球団『東京タイタンズ』のオーナー板倉義男（73）宅に空き巣に入る。激怒した板倉の挑発を受け、史也と板倉の因縁が始まる。

対決の過程で、史也はリトルリーグ時代の元チームメイトで現在『東京タイタンズ』の選手である椿春樹（30）と再会する。かつて

親友だった椿との人生の格差に愕然とする史也は、板倉へ「試合を中止しなければ椿を殺す」と脅迫状を送りつける。

試合中止の決断を迫られた板倉だったが、犯人らしき影が映った試合映像を見たことで、高性能カメラを使った犯人撮影を画策し、試合を断行。犯人をおびき寄せなるべく椿を囮として出場させる。

試合は7時半を迎え、球場に史也が現れる。椿は犯人対策として用意された分厚い防弾壁に守られた鉄の箱に身を隠したことから辛くも難を逃れる。

板倉の画策は成功し、史也の顔が割れる。板倉が背後に迫ってきているとは知らず、その後も史也は椿へ粘着し、椿をプロ野球界から抹消すべく脅迫を続ける。

史也と板倉の攻防は続くも、板倉の執念が身を結び史也は捕えられ、板倉による私刑がおこなわれる。

激しい制裁を受ける中、史也は栄光の人生を歩む椿への嫉妬をぶちまける。その場にいた椿はかつての友を憎みきれず、懸命に史也を諭すも、二人は分かり合えない。

全身を拘束されていた史也は、最後の力を振り絞って縛られた縄を解く。焦った板倉は史也へライフルを発砲。その瞬間、7時半を迎え、亀のように緩慢に進む銃弾が史也の額へめり込む。

混濁する意識の中で、椿と共にプレーしたりトルリーグの試合の記憶が史也の脳裏に蘇る。人生で最も輝いた瞬間を噛みしめながら、史也は息絶えるのだった。

登場人物

鍋島史也(10)(30) 元球児

椿春樹(10)(30) プロ野球選手

鍋島紀子(65) 史也の母

秋山(60) 東京タイタンズ球団社長

飯田(57) 東京タイタンズ球団代表

上原(48) 東京タイタンズGM

勅使河原昭二(55) 実業家

勅使河原のぶ子(50) 昭二の妻

江藤(90) プロ野球コミッショナー

椿詩織(27) 椿の妻

椿竜之介(5) 椿の息子

篠塚 東京タイタンズ監督

椿の父

椿の母

板倉義男(73) 東京タイタンズオーナー



○食品工場・中（夕）

どんよりした薄暗い作業場。

帽子とマスクで顔を覆った全身白づくめの作業員らが、ベルトコンベアの前で黙々と立ち仕事をしている。

蒸す前の肉まんがベルトコンベアからひっきりなしに流れてくる。

その流れの終わりに、死んだ目をした鍋島史也（30）が立っている。

史也、流れてきた肉まんをひつつかむと、脇にある金網の敷かれたトレーへ移す。

肉まんをつかんで、移す。

つかんで、移す。

不毛とも思える行為を間断なく繰り返す。やがてトレーが肉まんて満たされると、別の白づくめがぬっと現れて、新しい金網と取り替える。

史也、生氣のない目で壁時計を見る。

時計は午後▲時を指している。

×

×

×

7時29分。

史也、肉まんをつかんで移している。

疲れて手を休めようものなら、たちまち見回りの社員の檄が飛ぶ。

社員「手エとめない！ ラインとまるよ！」

史也、仕方なく肉まんをつかみはじめる。と、ベルトコンベアからピカピカ光る物体が流れてくる。

史也「：？」

腕時計だ。

史也、手もとに流れてきた腕時計を何となく手にした瞬間――

腕時計が激しい閃光を放つ。

史也「?!」

一瞬の光に包まれた後、史也、眩しそうに目を開け、目の前の光景を見て、

史也「(ハッとする)」

白づくめも、ベルトコンベアも、あらゆるものが静止画のように停止している。

壁時計の針は、時半を指している。



○タイトル

○板倉邸・外観（2週間後）

一等地に構える豪邸。

○同・和室

板倉義男（73）、秋山（60）、飯田（57）、

上原（48）の四人、すき焼きなどが並ん

だテーブルを囲んでいる。

大型テレビにプロ野球球団『東京タイタ  
ンズ』の試合中継が流れている。

板倉「（上原へ）さ。若いんだからちびちびや  
ってないで。注いであげよう（とワインボ  
トルを取る）」

上原「（恐縮してグラスを差し出す）」

板倉、ワインを注ぐ。

板倉「こうして我々が集まり自球団の試合観  
戦をする。たまにはいいものだろう」

一同「（頷く）」

大型テレビに椿春樹（30）が映る。

打席でバットを構える椿の姿。

秋山「（画面を見て）椿君をFAで穫ったのは  
正解でしたね」

上原「ええ。シーズン序盤とはいえ OPS が  
1.29。相手チームからしたら脅威でしょう」

飯田「まったくだ」

板倉「彼のFAに関しては、上原君、GMの  
ある君の手柄だろう」

上原「（謙遜し）社長をはじめ様々な方のお力  
添えがあつてのことです」

秋山「（慌てる）私なんぞ。何といつても最初  
に椿君の名前を獲得選手の候補に挙げた  
のはやはりオーナーですから」

飯田、上原「大きく頷く」

板倉「（満更でもない）語弊があるかもしれん  
が、選手は競走馬と同じだ。私は走る馬が  
好きだ。走らない馬など馬とはいえん」

一同「（神妙に聞いている）」

板倉「私は一目みてピンときたよ。彼はサラ

ブレッドだ。これまでのキャリア以上に活躍する時が必ずやってくるかね」

飯田「さすがはオーナー。お目が高い」

板倉「まア、彼の場合、今年は他の選手よりちと高いニンジンをぶらさげてるんだ。しっかりと走ってもらわなきゃ困る」

一同「(笑う)」

板倉「さ。遠慮はいらない。いいワインなんだ。どんどん飲みなさい」

一同、恐縮してワインを飲む。

飯田「…ところで、最近、時半の男が世間を騒がせてますね」

板倉「例の正体不明の怪盗だろう」

秋山「何でも犯行時刻が必ず、時半だとか」

飯田「…実は知り合いの家がやられましたね」

板倉「ほう（と興味を示す）」

飯田「それが妙な話でして。十日ほど前のことです」

○勅使河原宅・リビング（回想）

飯田の声「被害にあったのは家内の友人で、

近代美術の収集家でした。事件が起きたのは夜〱時半。彼女は一人で自宅にいました」

アーティステイックなインテリアが施された広い室内。

ひと際目立つのが壁に飾られた一枚の絵

——ダミアンハーストのドットペインティングだ。

勅使河原のぶ子(50)、ソファでうっとり絵を眺めている。

足もとで室内犬のマロンちゃんがゴムボールと戯れている。

のぶ子「マロンちゃんも見ましようよ。ダミアンハーストよ。ドットペインティングよ。ずーっと欲しかったんだから」

と、室内の壁時計が〱時半を指す。マロンちゃん、何かギョツとしたようにのけぞると、急にわんわん吠える。

のぶ子「…?」

マロンちゃん、猛スピードで廊下のほう

へ走り去る。

のぶ子「(マロンちゃんを見て)そっ。じゃママが独り占めしちゃうから」

のぶ子、視線を絵に戻すと――  
ない。

壁にあった絵がない。

のぶ子「(目をこする)」  
がダメ。

なくなっている。

飯田の声「一瞬の出来事でした。壁に飾られた絵が忽然と姿を消してしまったのです」  
のぶ子「(あ然)……」

○(戻って) 和室

飯田「警察の調べでは何者かが窓から侵入した形跡はあったものの、設置されていた監視カメラの映像には犯人の姿は映っていませんでした。結局未だ真相はわからずじまいです」

板倉「…それは奇ッ怪な話だな」

上原「ㄿ時半といえば間もなくですが（ちらと腕時計をみる）」

時計の針がㄿ時半を指そうとしている。

秋山「事件は毎晩ですから今夜もどこかで」

一同、何となく押し黙る。

板倉「切り替えて）そうだ。帰りに土産としてワインを持っていくといい」

秋山「それはありがたい」

飯田「オーナーはワイン通ですからね。上原君、よかったな」

板倉「何だ。君も嗜むのか」

上原「実は目がないのですがつい飲み過ぎてしまいました」

飯田「聞いたぞ。店で酔っ払って目が覚めたら自宅で素っ裸だったそうじゃないか」

上原「（照れる）いやア」

板倉「そりゃいかん。ワインだけにちと顔が赤くなる話ですな（と豪快に笑う）」

秋山、飯田、上原「（…笑う）」

その瞬間――

時刻は、時半を迎える。

口を開けて笑ったままストップする一同。  
襖が開き、野球バットを手にした史也が  
ぬつと顔を出す。

腕時計が史也の手首で不気味な輝きを放  
っている。

史也、室内を見回す。

史也、バットをマイク代わりにし、

史也「(小声で)今日は板倉さんのお宅に訪問  
しています。板倉さんは何とプロ野球チー  
ムのオーナー。やっぱり儲かりますか？」

と笑顔の板倉へマイクを向ける。

板倉「…(反応なし)」

史也、腰を下ろし、板倉の懐をまさぐる。

史也「持ち物チェックしますね」

史也、板倉から財布を奪う。

中身を確かめると万札が詰まっている。

史也、財布をポケットにしまう。

× × ×

史也、一同から財布や腕時計などをあら

まし奪い終える。

史也「(立つ)小耳に挟んだ情報では自宅にワインセラーがあるようで。いつてみようと思えます」

○同・ワインセラーのある部屋

壁一面の板棚に高級ワインが並んでいる。  
史也、適当にワインボトルを一本つかむと、バットケースにねじ込んでくすねる。

史也「(呟く)素振りでもするか」

史也、それっぽくバットを構える。

そしてフルスイング。

ガチャン！——ワインボトルにバットが直撃し、何本かのビンが割れる。

ワインの赤い液体が床を濡らす。

史也、気にせず素振りを続ける。

○同・和室

ストップしている笑顔の板倉ら。  
室外からビンの碎ける音が響く。



○鍋島家・外観（夜10時）

小さな一軒家の門に「鍋島」の表札。

○同・居間

史也、食卓で煮物を箸でつまんでいる。

テレビからニュースが流れる。

キャスターの声「今日午後〆時半頃、プロ野球球団『東京タイタンズ』のオーナー板倉義男氏の自宅に空き巣が入り、現金等が盗まれ2000万相当の被害が出た模様です」

史也「（ほくそ笑む）」

台所から母紀子（65）がトンカツの盛りられた皿を手にしてやってくる。

キャスターの声「犯行時刻から警察は〆時半の男の犯行とみて捜査を続けています」

紀子「（テレビを見て）また出たの、妖怪」

史也「…怪盗だろ」

紀子「え？」

史也「怪盗だよ。妖怪じゃなくて」

紀子「(聞いてない)やだ。東京タイタンズっていったら椿君のいるところじゃない」

史也「(答えず、煮物をつまむ)」

紀子「何だか物騒ねえ」

紀子、食卓につく。

史也「(トンカツを見て)ソースは？」

紀子「自分で持ってきたさいよ」

史也、渋々立ちあがり、台所へいく。

紀子、食べ始める。

史也の声「中濃なの？」

紀子「トンカツソースしかないかも」

史也の声「俺中濃派なんだけど」

紀子「トンカツなんだからトンカツソースで

いいでしょう」

史也、戻ってくる。

一方の手にトンカツソース。もう一方の

手にワインボトルが握られている。

史也、食卓にワインボトルをおく。

史也「やるよ」

紀子「(見て)こんなものどうしたの」

史也「安物だけど」

紀子「安物だったって…あんた仕事してないじゃない」

史也「…」

紀子「工場、辞めちゃったんでしよう」

史也「(うんざりと)もらったんだよ。玄関にまだあるから飲みたいなら勝手に飲めよ」

史也、座り込んでトンカツをがつつく。

紀子「(心配そうに)…」

×

×

×

片付けられた食卓。

紀子、湯飲み茶碗でワインを飲んでいる。

開けられたボトルのラベルにはフランス

語で「ロマネコンティ1990」の文字。

紀子「(ほろ酔いし)案外いけるわね」

### ○同・史也の部屋

散らかり放題の室内。

史也、畳に寝そべってうとうととしている。

パソコンに映されたライブ配信画面から

新しいニュースが流れる。

キャスターの声「たった今板倉氏が自宅に戻  
られました。現場と中継が繋がっています」

史也「(起き上がる)」

○板倉邸・前

門の前に無数の報道陣。

板倉が車から降りてくる。

一斉にカメラのフラッシュが焚かれる。

板倉「(物凄い剣幕で)どけッ！」

板倉、報道陣を押しつける。

板倉「何時だと思ってる！ 無礼だぞ！」

板倉、荒々しく門へ入っていく。

記者たちの声が飛び交う。

記者「板倉さん！ 被害に遭われたときの  
様子をきかせてください！」

板倉「…」

記者「一部取材によると被害者らを集めて  
自警団を作るとの噂がありますが、どうな  
んでしょう?!」

板倉「…」

記者③「盗まれたワインには板倉さん愛蔵の  
06年のロマネコンテイも混じっていたと  
のことですが、間違いないですか?!」

板倉「かっとなる」警察がだらしないんだ!  
国民の財産が犯されている非常事に、この  
体たらくはなんだ! いつまで手を拱い  
ている!」

記者②「ではやはりご自身が「時半の男」対  
して何らかのアクションを起こすとい  
うことですか?!」

板倉「…話は終わりだ。失せろ」

板倉、玄関のドアを開ける。

記者①「板倉さん! 最後に犯人に一言!」

板倉、立ち止まり、

板倉「(嘲る)…怪盗だか何だか知らんが「時  
半のニ半ニはさしずめ半端者の半だろう。せ  
いぜい首を洗って待ってるんだな」

○鍋島家・史也の部屋

史也、画面越しに映る板倉の憎らしいほどの不敵な面構えをじっと見つめ、  
史也「(瞳が燃える)」

○東京ドーム・外(翌日・夕)

大勢の観客らの姿。

グッズ売り場が賑わっている。

○同・中

グラウンドで踊るマスコットガール。

椿、ベンチでグローブを磨いている。

○同・実況席

テレビカメラの前に、ヘッドセットをつ

けた実況と解説の男。

実況「時刻は18時。まもなく試合開始です」

中継用カメラがVIP席を捉える。

板倉と江藤(90)がガラス張りの高みからグラウンドを見下ろしている。

実況「：只今カメラに映っていますのは板倉

氏とコミッションナーの江藤氏。江藤氏は元  
警視庁副総監の経歴をお持ちの方です」

○同・VIP ルーム

板倉と江藤、窓の前に立っている。

江藤「妙なことに首を突っ込んだようだな」

板倉「…売られた喧嘩は買うのが俺の流儀さ」

板倉、煙草をくわえ、火をつける。

江藤、その場を離れると、苦しそうにソ

ファーへ座り込む。

江藤「体がしんどくてな」

板倉「(江藤を見て)…じいさん、頼みがある」

江藤「(目をつぶる)」

板倉「警察は例の犯人についてどこまで目星  
をつけている？」

江藤「…」

板倉「俺に捜査情報を流せよ。こっちはこっ  
ちで動こうと考えてるんだ」

江藤「…」

板倉「おい。じいさん」

江藤「(目を開ける)この通り今じゃ老いぼれた警察OBに過ぎん。君も妙な気は起こさずに警察に任せればいい」

板倉「任せるつもりがないから頼んでるんだ。俺とじいさんの仲だ。教えろよ(と迫る)」

江藤「∴」

江藤、重そうに腰をあげ、扉へ歩き出す。

板倉「どこへいく？」

江藤「君の負けず嫌いは結構だが、一緒にいたんじゃ危なくてな。ホテルで休ませてもらうよ」

板倉「(薄ら笑う)相手はケチな空き巣魔だ。

この衆人環視の中じゃ何もできんさ」

江藤「∴どうかな？」

○同・スタンド

帽子を目深に被った男が双眼鏡でVIPル

ームの様子を伺っている。

史也だ。

左手には例の腕時計をつけている。



史也「(板倉を捉えてニヤリと笑う)」

と周囲から轟くような声援が沸く。

ファン「椿選手ー！」

ファン「椿ー！」

椿がグラウンドに颯爽と現れる。

椿、歓声の中、キャッチボールを始める。

史也、双眼鏡を椿に向ける。

凜とした椿の顔がアップで映る。

その顔に少年時代の面影が重なってー

○野球グラウンド(回想)

少年時代の椿(12)、サードを守っている。

ピッチャーマウンドには史也(12)。

史也、投げる。

相手を三振に仕留める。

椿「史也へ)ナベちゃん！ ナイスピッチ！」

史也「(笑顔になる)」

○(戻って) スタンド

史也「(胸がざわつく) 春ちゃん…」

× × ×  
スコアボードの時計が「時半を指そうと  
している。

史也、イヤホンで実況を聞いている。

実況の声「時刻はまもなく「時半。試合は現在  
5回裏。一点リードで迎えたタイタンズ  
の攻撃。打席には今シーズン絶好調の椿」  
打席に立っている椿。

実況の声「さあ椿、ツーストライクと追い込ま  
れた。ピッチャー、投げた」  
椿、打つ。

ボールは一塁線へ飛ぶ。

実況の声「一塁線へ引張…(声が途切れる)」  
——「時半である。

球場内に静寂が訪れる。

史也「タイム!!!」

史也、立つ。

史也「(実況風に)只今主審からタイムがあり  
ました。何かあったのでしょうか」

選手や観客、あらゆるものがストップし

ている中、史也、最前列へ歩いてゆく。

史也、最前列までくると、グラウンドへ飛び降りる。

史也、一塁線上でぴたっと止まっているボールを拾い上げる。

史也、視線をホームベースへ向ける。

その先にフルスイングしたままストップした椿の姿。

#### ○同・外

犬と散歩する通行人がストップしている。

#### ○同・中

史也、バッテリーボックスに立つ椿の周りをうろついている。

史也「(ボールをお手玉し)この感触、久々だよ。最近肉まんしか触ってなかったからさ」  
椿「(反応なし)」

以下、史也の独り台詞が続く。

史也「工場で働いてたんだけど。結構続いた

よ。ω年くらい。薄暗いところでドブネズミ  
みたいなさ。実は辞めるちよっと前に時給  
があがったんだけどね…20円」

史也、ちらりと椿を伺う。

史也「ノーリアクション？ そうだよ。春  
ちゃんは年俸5億。ホームラン一本換算で  
1250万円の男だもん」

史也、やっと椿の顔を見る。

史也「奇遇だよ。こんなところで」  
体格差のため、史也が見上げるような格  
好になる。

史也「…そうだ」

史也、腕時計を椿に見せつける。

史也「工場でこれ拾ってから不思議な力をゲ  
ットしちゃって。動いてるのわかる？」

腕時計が秒針を刻んでいる。

史也「毎晩、時半になると針が動き出すの。  
で代わりに周りの世界がストップする。何  
いってるかわかんないよね…でも春ちゃ  
んが今止まってるのはガチじゃん？ で

腕時計の針が2周して24時間が経つと、針は止まって世界が再スタート。春ちゃんたちが動き出す」

史也、腕時計を見ながら椿の前をうろろする。

史也「だから春ちゃんが動き出すまで後20時間50分くらい残って…あ。言い忘れてた。厳密に言えば世界は完全にストップしてるわけじゃないんだった。一昨日気づいた」

### ○椿の主観

ゆっくり瞬きする。

目の前を超高速でうろつく史也。

史也 M「俺がこうして24時間を過ごす間に周りの世界では1秒経ってる。7時半00秒に世界が止まって再スタートするのが00秒じゃなく01秒だったから。ってことはさ、言い換えれば俺的に7時半の1秒間で24時間を体感してるってわけ」

○（戻って）グラウンド

史也「まア細かい話はどうでもいいや…要するに、俺、何でもできるんだよ」

史也、ボールをキャッチャーミットに食い込ませる。

史也「（ボールを指差し）春ちゃん三振しちゃった…」

史也、ミットからボールを引っこ抜く。

史也「（笑う）冗談だよ。ほんとはき、板倉をフルチンにして晒してやろうかとも思ってたんだよ。でも…」

史也、笑みが消えている。

× × ×

球場内の時計が動き出す。

実況「ったあああー！ ライト前ヒツ…

おや？」

椿、走り出そうとして立ち止まる。

椿「??？」

場内がざわつく。

ボールがない。

実況「ボールが消えた!? 椿の打ったボールが消えました!！」

審判と選手、うろたえている。

実況「(気づいて) あーっつと!！」

中継カメラがVIPルームを捉える。

VIPルームの窓の奥に板倉の姿。

板倉、大きく開いた口の中にボールがねじ込まれている。

板倉「(悶絶している)」

ボールの表面にはマジックペンで「7時半の男」と書かれている。

○同・スタンド(夜8時)

観客、ぞろぞろ引き上げていく。

アナウンスの声「お客様にお知らせします。

本日の試合は中止となりました。試合結果につきましては規定により5回裏の時点でリードしていた東京タイタンズの…」

○東京ドーム・VIPルーム

板倉、ソファで不機嫌そうに顎を氷水で冷やしている。

救急箱を抱えたスタッフと、秋山がそばに立っている。

秋山「大変なことになりましたね」

板倉「…」

テーブルに脅迫文の書かれたボール。

板倉「(ボールを掴み、読む) ペナントレー  
スを中止しろ。さもなくば椿に危害を加える。」「時半の男…ふんッ。忌々しい」

秋山「それにしても犯人は一体どんなカラクリを使ってこんなことを…」

板倉「今に暴いてやるさ」

飯田、入ってくる。

飯田「失礼します。椿君ですが、警察に護衛をつけてもらい帰宅させました」

板倉「そうか」

飯田「念のため椿君から話を聞いたところ、犯人への心当たりはないとのことです」

板倉「…」



秋山「しかし妙ですね。これがオーナーに対する犯人の挑戦であれば、なぜ犯人は椿君を標的に選んだのでしょうか」

板倉「犯罪者の考えることなどわからんよ」

秋山「はア」

板倉「それとも何かね。君は私が標的になるべきだとしてもいいたいのかね？」

秋山「(慌てる) 私はただ…」

板倉「(スタッフへ怒鳴る) おいッ！ 氷が溶けてるぞ！ さっさと取り替えんか！」

スタッフ、大慌てで氷水を取り替える。

板倉「気の利かん連中だ」

秋山「(恐縮する)」

板倉「とにかく、明日のナイター戦がタイムリミットだ。それまでにどうするか、あるいは何かいい手を考えなければならん」

上原、入ってくる。

上原「失礼します。オーナー、お話が」

秋山「我々と話している。後にしてくれ」

上原「しかし…」

飯田「大事な話なのかね」

上原「いえ、試合映像で少し気になる点が」

板倉「…？」

○タワーマンション・外観

都会にそびえ立つ超高層マンション。

○同・椿宅・リビング

広い室内。

大きなショーケースが設置されている。

中にトロフィーや盾、記念のボール等が

ずらりと並んでいる。

妻詩織(27)、バルコニーで電話している

椿の様子を不安げに見ている。

椿、電話を切ると、浮かない顔で室内に

やってくる。

詩織「誰から？」

椿「親父からだ」

詩織「そう。何だって？」

椿「大丈夫かと言。心配するなと言ってお

いた」

詩織「…明日の試合、中止になるよね？」

椿「…まだわからない」

詩織「…」

息子の竜之介(5)、やってくる。

椿「(笑顔で) 竜之介。起きてたのか」

竜之介「腹筋20回やったよ！」

椿「そうか。よし。じゃ俺と一緒にもう20回

やっってから寝るか」

竜之介「うん！ お母さんもやろうよ」

詩織「えー。私は見てるよ(と笑う)」

椿と竜之介、並んで腹筋をする。

詩織「…(心配する)」

○東京ドーム・VIPルーム

上原、ノートパソコンを操作している。

画面には中継用のハイスピードカメラで

撮影された今日の試合映像。

上原「〃時半の瞬間を捉えた映像です」

映像を見る板倉、秋山、飯田。

打席で椿がフルスイングするシーンが超  
スローモーションで再生される。  
と椿の周りに、一瞬、黒い影。

板倉「(驚く) 何だこれは？」

飯田「残像のようなものが映ってますね」

板倉「(興味を示す) はっきり映せんのか」

上原「これが限界です」

秋山「上原君、この映像が何だというんだ」

板倉「(ぼそり) 犯人の影かもしれん」

秋山「犯人のですか？」

板倉「…もっとはっきり確認する必要がある  
な」

飯田「(上原へ) どうなんだ？」

上原「この映像は 2000fps、つまり1秒間を

2000コマに分割できるハイスピードカメラ  
ラで撮影されたものでして、スポーツ中継  
などで使われる高性能なものとなります。  
もっとも最近ではハイスピードカメラの  
性能も高くなって…」

板倉「(遮って) つまりこれ以上精密に撮れる

カメラはないのかね」

上原「(恐縮し)最新のものを使えば可能かと」

板倉「(何かひらめく)」

秋山「オーナー？」

板倉「(立つ) じいさんのところへいく」

○ネット記事(翌日・朝)

球を口にねじ込まれた板倉のドアップ。

以下の見出しがでかでかと踊る。

「〴〵時半の男、ペナントレース中止を要

求！ 人質は樁！」

○鍋島家・史也の部屋

つけっぱなしになったパソコン。

史也、爆睡している。

半開きになった筆筒の中には盗品である

財布や貴金属がびっしり。

のぶ子から頂戴したダミアンハーストの

ドットペインティングの上に食べかけの

ペヤング。

○同・居間

紀子、煎餅をかじってテレビを見ている。  
テレビに以下の映像が流れる。

○テレビスタジオ

識者らがしゃべっている。

識者1「私はね、いずれこうした形で犯行が  
過激化していくことは予想してましたよ。  
警察の初動捜査に問題があったと指摘せ  
ざるを得ませんね」

識者2（警察OB）「お言葉ですが犯行手口の  
タネも仕掛けもわからない。正体不明の者  
をどうやって捕まえろというんですか？」

識者1「（見下す）それを何とかするのがお宅  
たち警察組織の仕事でしょうが」

識者2「（ムキになる）何だその言い方は。警  
察官だって必死にやってるんだ」

ヒートアップする二人。

司会、なだめる。

司会「いったん落ち着きましょう！」

司会、フリップを出す。

事件のあらましが書かれている。

司会「〽時半の男からの脅迫を受けたプロ野球組織は本日午後一時にコミッションナーの江藤氏による記者会見を行います。ペナントレース中止の決定がなされるのかどうか注目が集まっています。一方、犯人の標的となった樁選手ですが、今朝早くご家族を連れて自宅を離れ……」

○（戻って）居間へ台所

紀子「（ぼつりと）どうなるのかしらねえ」

と煎餅を食べる。

史也、寝ぼけ眼でやってくる。

紀子「（見て）今起きたの？ ご飯カレーだから食べるならあっためて」

史也、台所にいく。

コンロに火をつける。

床の隅に空になったワインボトル。

史也、居間へ戻り、

史也「ワインどうだった？」

紀子「あ、おいしかった。一昨日と昨日で」

本開けちゃった」

史也「ふーん（と満足げ）」

紀子「あんたニュース見た？ 妖怪。まさか

椿君が狙われちゃうなんて」

史也「だから怪盗だろ…」

紀子「え？」

史也「板倉ってのが犯人を挑発するからこうなるんだ」

史也、煎餅を一枚取る。

紀子「カレー食べる前にお菓子？」

史也「（食べながら）全部板倉が悪いんだよ」

紀子「そう？」

史也「そうだよ」

紀子「でも心配よね、椿君」

史也「…」

○河川敷



椿、バットで素振りをしている。

○ホテル・室内

板倉、電話をしている。

板倉「：私だ。カメラの方はどうなってる？

：そうか：頼んだぞ（と電話を切る）」

板倉、ニヤリとする。

板倉、振り返り、ソファで眠るように

目を閉じている江藤を見下ろす。

○ホテル・室内（回想・昨夜）

薄暗い室内。

板倉、じっと江藤を見据え、

板倉「：じいさん。いい話を持ってきた」

○（戻って）室内

板倉「（江藤へ）こっちの手筈は整いそうだ。

後は昨晚俺が頼んだ通りにじいさんが会

見でゴーサインを出してくれればいい」

江藤「：」

板倉「おい。じいさん」

江藤「（目をあけ）…やはり飲めんな」

板倉「今更何をいうんだ」

江藤「ペナントレースは中止。君のところに  
も大きな損失が出るだろうが、こうなった  
以上は人命が優先だ」

板倉、大きくため息をつく。

板倉「昨日の俺の話をいまいち理解していな  
いようだ。いいか。もう一度いうぞ。俺が  
頼んでいるのは金のためじゃない。リスク  
がついて回るのも承知してる」

江藤「…」

板倉「だがもし試合を決行することで警察が  
血眼になって追っている犯人の尻尾を掴  
めるとしたら？」

江藤「…（まぶたを閉じる）」

○河原

史也、上機嫌で自転車をこいでいる。

史也「（鼻歌）」

正面からランニング中の椿がやってくる。

史也「(気づいて、はっとする)」

史也、自転車をこぐ足が震える。

二人、すれ違ふ。

史也、よろめいて転倒してしまう。

椿、振り返り、

椿「…大丈夫ですか？」

史也、慌てて自転車を起こす。

史也、うろたえながら自転車を漕ぎ出す。

椿「(史也の後ろ姿を見送って)…」

声「パパ！」

竜之介と詩織、やってくる。

詩織「記者会見、はじまるよ」

椿「…ああ」

詩織「どうかした？」

椿「いや…いこう」

椿、竜之介の手をとって歩き出す。

○ホテル・記者会見場

報道陣の前に江藤と板倉が現れる。

一斉にフラッシュが焚かれる。

記者「板倉オーナーも同席か…」

○椿の実家・リビング

椿、詩織、竜之介、椿の両親、テレビの  
前に座っている。

一同、固唾を飲んで見守っている。

○鍋島家・史也の部屋。

史也、パソコンの前に座っている。  
ライブ配信で会見を見ている。

○ホテル・記者会見場

江藤、マイクを持つ。

江藤「メモを読み上げる。が声が聞こえない」  
板倉「(耳打ち) マイク入ってないぞ」

江藤「(マイクをオンにし) これはプロ野球に  
対するテロリズムである。この未曾有の事  
態に際し、我々は断固たる態度で犯人に臨  
む。プロ野球には先人が築き上げた長い歴

史があり…」

○椿の実家・リビング

椿、テレビで会見を見ている。

江藤の声「それに伴う社会的責任がある。今、犯人の脅迫に屈すれば悪しき前例を生み出すことになりかねない」

○鍋島家・史也の部屋

史也、ライブ配信で会見を見ている。

江藤の声「犯人に告げる。我々がテロリストの要求を呑むことはない。よって試合は中止せず、ペナントレースは全て予定通り開催する旨をここに表明する。以上」

○ホテル・記者会見場

記者らの質問が飛ぶ。

記者「試合強行は無茶だ！ 相手は神出鬼没の犯人なんですよ！」

江藤「試合は選手の安全を最大限考慮した上

で行います。観客の安全については、これを最優先し、当面は無観客試合とします」  
記者「答えになってませんよ！」

江藤「えー（と言葉に詰まる）」

板倉、痺れを切らし江藤からマイクを奪う。

板倉「空き巣ごときを恐れてどうする。プロ野球の威信にかけて今こそ選手には戦ってもらわねばならない！」

場が静まりかえる。

板倉「出たくない選手は出なくていい。代わりは幾らでもいる。我々の決定を拒んだ者は明日から居場所がなくなるものと思え」

板倉、記者らを見回し、

板倉「そしてそれは樁選手も例外ではない。彼にも試合に出てもらおう」

場がどよめく。

記者「彼は犯人から名指しで脅迫されてるじゃないですか！」

板倉「むろん彼を守る対策は練ってある」

記者「具体的には?!」

板倉「それは今夜の試合をご覧になればわかる（と自信ありげ）」

○椿の実家・リビング

椿、かっとなって立ち上がる。

詩織、部屋を出ていく椿へ、

詩織「春っ！」

○同・洗面所

椿、鏡の前で天を仰ぐ。

○鍋島家・史也

史也、パソコンを消し、立ち上がる。

史也、机の引き出しを開ける。

引き出しの中に野球ボールが一つ。

ボールにはマジックペンで「少年野球東京大会優勝」と書かれている。

史也、ボールを手にとって、

史也「（呟く）春ちゃん…」

○道を行く車

○その車内

板倉、電話している。

板倉「今そちらへ向かっています…ええ…カ  
メラの件は抜かりありません」

○勅使河原の別宅・大広間

勅使河原昭二(55)、ソファーに腰をかけた電話している。

勅使河原「板倉さん、それにしても実に見事な記者会見でしたな」

板倉の声「何てことはありませんよ。マスクミを相手にするのは慣れていきますので」

勅使河原「犯人対策をもったいつけるあたり、あなたも役者ですな(と笑う)」

○車内

板倉「それで、その件であなたに頼んでおい



た例のものは間に合いそうですかな…：そ  
うですか…（と電話を切る）」

板倉、別の番号に電話をかける。

板倉「…俺だ…例のものは問題ない。そっち  
はどうだ？」

○東京ドーム・関係者専用駐車場

大型トラックが到着する。

秋山、板倉と電話している。

秋山「（板倉へ）ちょうど到着したところです」  
作業員の手でトラックのコンテナから数  
台の高性能ハイスピードカメラが下ろさ  
れていく。

秋山「しかし大丈夫ですかね。椿君が試合に  
出てくれないことには…」

○車内

板倉「安心したまえ。そのために会見で発破  
をかけたんだ（と電話を切る）」

○椿の実家・リビング

椿、バッグに野球道具を詰めている。

椿母、心配そうに見ている。

椿父、やってきて、

父「外に刑事の方がきている。お前がどうしてもというなら球場まで送ってくださる

そうだ」

椿「そう。助かるよ」

父「…行かなくても誰もお前を責めやしない」

椿「わかってる。だけど野球が俺をここまでにしてくれたんだ」

椿、父と母と抱擁を交わす。

隣の和室で、詩織と竜之介が身支度をして  
ている。

椿「(詩織へ)警察の人からいわれた通り竜之  
介をつれてホテルへ隠れるんだ」

詩織「…わかった」

椿「(笑顔で)竜之介、いい子にしてろよ」

竜之介「(無邪気に)パトカー乗れるかな」

椿「(笑う)」

椿、玄関へ向かう。

詩織が後を追う。

詩織「…ほんとにいくの？」

椿「ああ」

詩織「でも…」

椿「危険なのは仲間も同じだ。俺だけ逃げ隠れはできない」

詩織「…」

椿、玄関のドアを開ける。

詩織「(叫ぶ) 春!」

椿「…(振り向かない)」

詩織「これ、持ってって」

椿「…?」

椿、振り返る。

詩織の手のひらに手作りのお守り。

詩織「何となくこうなる気がして…内緒で作ったの。竜之介も手伝ったんだよ(と渡す)」

お守りにはあどけない字で『パパへ』と書いてある。

椿「(微笑む)」

詩織「明るく）夜ご飯。春の好きなステーキ。

焼いて待ってるから」

椿と詩織、見つめ合う。

詩織「ちゃんと帰ってくるんだよ」

椿「ああ（と頷く）」

○勅使河原の別宅・客間（夕）

室内に飾られた野生動物の剥製。

椅子に板倉と勅使河原昭二。

板倉、額縁に入ったライフルの許可証を

見上げる。

板倉「ライフルですか」

勅使河原「そうです。鹿狩りが趣味です」

板倉「ほう」

のぶ子、茶を持って入ってくる。

マロンちゃんが後ろからついてくる。

勅使河原「家内です」

のぶ子「（茶を差し出す）どうぞ」

板倉「いやどうも」

のぶ子、一礼して去る。

勅使河原、煙草に火をつける。

勅使河原「家内には狩りは残酷だからやめろ  
と叱られてますがね（と笑う）」

板倉「（笑う）それで、頼んでいた例のもので  
すが、どうですかな」

勅使河原「作業は終えました。今トラックで  
運ばせて、もうじきお宅の球場に着く頃で  
しょう」

板倉「（満足して）そうですか。あれがないこ  
とには事が運ばないので安心しました」

勅使河原「しかし板倉さん、あなたも奇天烈  
なことを考えるお人ですな。いや、もちろ  
ん悪い意味ではなく…」

板倉「あなたの協力があったてのことです。加  
えてこんなに立派なお屋敷まで用意して  
くださった」

勅使河原「何年も使っていない別宅でしてね。  
奴に空き巣に入られてから家内が不気味  
がって家に帰りたがらないもので」

板倉「お気持ちはおわかる」

勅使河原「被害者同士手を取り合わねば。こ  
こは作戦本部としてどう使ってもらって  
も構いません」

板倉「では遠慮なく」

勅使河原「(微笑む)晴れて自警団結成となり  
ましたな」

○東京ドーム・外

ものものしい警備。

大勢のギャラリーに混じって史也の姿。

○東京ドーム・中

無人のスタンド席。

水を打ったような静けさ。

その中で練習をする椿。

×

×

×

バックネット裏。

スタッフが高性能ハイスピードカメラを

セットしている。

スタッフ「(インカムで)バックネット及び一

塁三塁双方のベンチ付近とここバックネット裏。計<sup>ハ</sup>台。取り付け完了しました」

× × ×

スコアボードの時計が<sup>ハ</sup>時前を指す。

無人の放送席。

実況の声「さアまもなく試合開始…」

○東京プリンスホテル・室内

マイクを装着した実況と解説の姿。

実況「無観客試合となった本日のナイターゲーム。実況は東京ドームに隣接する東京プリンスホテルから行って参ります」

○東京ドーム・外

史也、ベンチに腰をかけ、スマホで野球中継を観ている。

○同・中

試合している。

無人のドーム内にバットの鈍い音が響く。

実況の声「時刻は現在、時15分を回ったところ。ブルースターズが2点を追加しなおも攻撃中。さて、問題の時刻が近づいて参りましたが…」

タイタンズ監督の篠塚、ベンチから出てくる。

篠塚、タイムを要求。

審判、試合を中断する。

実況の声「タイムがかかりました」

守備についていたタイタンズの選手ら、一斉にベンチへ戻る。

審判と相手チームもグラウンドから引き

上げていく。

実況の声「選手たちがベンチへ引き上げていきます。犯人対策のようです」

全員、ベンチへ避難する。

実況の声「ベンチには椿の姿もあります。し

かしこのままではあまりに…おっと?!

これは一体…」



○同・外

史也、スマホに釘付けになる。

史也「…？」

○勅使河原の別宅・リビング

板倉、勅使河原夫婦、テレビで野球中継  
を見ている。

フォークリフトに載せられた巨大な金庫  
がベンチ前に到着する。

板倉「(満足げに) お見事ですな」

のぶ子「あなた、あれは何？」

勅使河原「板倉さんから頼まれて作った特注

品だよ」

のぶ子「何だか金庫みたい」

勅使河原「大型金庫を改造して内側に鍵を付  
け替えた。外壁にはセラミックスの鋼板を  
取り付けた防弾仕様で、あれならライフル  
の弾を食らってもビクともしない」

のぶ子「だけど、あんなものどうするの？」

板倉「まア見てなさい」

○東京ドーム・中

タイタンズのベンチ前に巨大金庫。

スタッフら、芝生下のコンクリートにドリルで穴を開け、アンカーを打ち込んで金庫を固定する。

監督の篠塚、椿を呼びつける。

篠塚「オーナー命令だ。あの中に入れ」

椿「…あの中に？」

篠塚「入ったら内側から鍵をかける。外からは絶対に開けられないようになってる」

篠塚、椿に置き時計を渡す。

篠塚「犯行時刻は必ず1時半からの1秒間。

逆にいえばその1秒間さえ回避できれば助かる計算だ。中で1時半になるのを待ち、5秒、いや10秒経ったら出てこい」

椿「…これがオーナーのいった犯人への対策ですか？」

篠塚「そうだ」

椿「でも…こんな場所だ」

篠塚、椿の肩にそっと手をおき、ベンチへ去っていく。

椿「…」

スタッフの手で巨大金庫の扉があく。

椿、恐る恐る設置された巨大金庫の中へ足を踏み入れる。

電球だけの薄暗い室内。

スタッフ、扉を閉める。

椿、鍵をかける。

これでグラウンドから椿が消えた。

実況の声「何ということでしょう！ まさかの展開となりました！」

ぼつんと佇む巨大金庫。

それをト台の高性能ハイスピードカメラが狙っている。

○ホテル・室内

詩織、祈るように野球中継を見ている。

○東京ドーム・中

スコアボードの時計がまもなく「時半を  
迎える。

○同・巨大金庫の中

椿、小刻みに震えている。

その手にお守りが握られている。

時計の針が時を刻む――

「時半まで一分を切る。

椿「(恐怖がこみあげる)」

椿、お守りを強く握りしめる。

○勅使河原の別宅・リビング

板倉「(ニヤリ) さア、姿を見せろ。山猿」

○東京ドーム・巨大金庫の中

7時半まで10秒を切る。

29分51秒、52秒、53秒――

椿「(呻く) 詩織…竜之介…」

56秒、57秒、58秒――

59秒――

椿、ぐっと目をつぶる。

○同・バックヤード（夜、時半）

静寂のドーム内に足音が響く。

通路に男の人影が現れる。

○同・グラウンド

史也、巨大金庫の前にやってくる。

その手に金属バット。

史也、金庫をじっと眺める。

史也、バットを構えると、分厚く防護された金庫の壁をゆっくりと殴りつける。

史也「…春ちゃん。隠れてないで出てきなよ」  
ガンガンツーンと壁を殴りつけるバットの音がスタジアムに響き渡る。

○野球グラウンド（回想）

金属バットの快音が響く。

空高く舞い上がったボールがグラウンドの遙か後方へ飛んでゆく。

少年時代の史也、ベンチで歓声を上げる。  
チームメイトの椿、ガッツポーズをしな  
がらベースを一周する。

× × ×

スコアボードの表示は〇回裏。5対1。

史也、最後のバッターを三振に仕留める。

史也、マウンドでガッツポーズ。

× × ×

整列するリトルリーガーら。

椿、小学生とは思えぬ逞しい体つき。

その隣、まだあどけない顔をした史也。

選手一同「ありがとうございました！」

× × ×

史也、自転車置き場で自分の自転車を引  
いて歩いている。

チームメイト1、2、3、やってくる。

チームメイト1、いきなり史也の自転車  
を蹴り倒す。

史也「(驚く)」

チームメイト1「(悪態をつく)俺からレギュ

ラー奪っというて挨拶もなしかよ」

チームメイト②「史也のクセに生意気だ」

チームメイト③「このチビがッ」

史也「(恐怖で固まる)」

と椿、やってくる。

チームメイト①「(椿を睨む) 何だよ」

椿、無言で史也の自転車を起こしてやる。

チームメイト①「(蔑む) けっ。いくぞ」

チームメイト①、②、③、去っていく。

### ○河原の土手

椿と史也、並んで自転車を漕いでいる。

しばらく走って、史也、止まる。

椿「(気づいて) ナベちゃん？」

史也「チェーンが外れたみたい」

史也、自転車のチェーンを直そうとするが、うまくできない。

手が真っ黒になる史也。

椿「ナベちゃん、どいてみ」

椿、チェーンを直し始める。

史也「…春ちゃん、中学は私立ってホント？」

椿「うん。野球のためだ」

史也「…」

椿「この前親父と部活の練習を見学したけど、

キツそうだったよ。けど俺がいくと決めた

んだから弱音は吐けない」

史也「(寂しげに)…」

椿「ナベちゃんは？」

史也「フツーに地元の中学。だから、たぶん

あいつ等と一緒にだと思っ…」

椿「…あんな奴ら、野球でわからせればいい

んだ」

椿、立ち上がる。

椿「よし。直った」

椿、手が真っ黒。

椿「(手を見て、笑う)」

史也「(つられて笑う)」

椿「ナベちゃんはいいいボール投げるから絶対

中学でも活躍する。俺が保証してやる」

史也「(照れる)」



○（戻って）東京ドーム・グラウンド

史也「春ちゃん…」

壁を殴りつけるバットの音が次第に激しくな  
ってゆく。

○野球グラウンド（回想）

少年時代の史也、投げ込みをしている。

近くで椿、素振りをしている。

×

×

×

史也と椿、ランニングをしている。

椿「ナベちゃん。次の試合も勝とうな！」

史也「うん！」

×

×

×

監督、選手とミーティング。

監督「明日から地区大会だ。先発は史也！」

史也「はい！」

チームメイト1、2、3「不満げ」

×

×

×

夕方。

史也、倉庫前で道具の片付けをしている。

チームメイト「2、3、やってくる。」

史也、気づいて不安げな顔になる。

チームメイト「いっただろ。史也のくせに  
生意気だって」

チームメイトら、史也の体を抑えつける  
と、史也を倉庫へ押し込む。

チームメイトら、抵抗する史也を閉じこ  
めると、倉庫のドアを閉め、鍵をかける。

○倉庫の中

史也「（泣きそうになって）…出してよ」

と外から激しい物音。

チームメイト「こいつ！」

チームメイト「の声」「やっちまえ！」

史也、耳を澄ませる。

史也「…？」

ややあって外から鍵の開く音がする。

扉が開き、隙間から夕日が差し込む。

扉の前に傷だらけの椿が立っている。

チームメイトら、遠くへ逃げ去っていく。

史也「…春ちゃん」

椿、凜とした笑顔で史也へ向ける。

○（戻って）東京ドーム・グラウンド

史也「春ちゃんッ！…春ちゃんッ！！」

史也、とりつかれたように巨大金庫の壁をバットでガンガン殴りつける。

が、壁はびくともしない。

史也、バットを下ろし、壁をじっと見つめて――

○同・巨大金庫の中（7時半過ぎ）

椿、強く閉じていた瞳を見開く。

7時半 30分 3秒――

5秒――10秒――

何事もなく時計の針は進んでゆく。

椿「(ほっとする)」

椿、汗ばんだ手で恐る恐る鍵を開け、扉を開けると――

椿「(仰天する)」

グラウンド一面が火の海である。

椿の目の前で朦々とあがる黒煙。

「火事だ!」「逃げろ!」と怒号が飛び交う。

巨大金庫を覆い尽くした炎が椿の行く手を塞いでいる。

椿「(逃げられない!)」

椿、お守りを見つめると、覚悟を決めて炎の中へ飛び込んでゆく。

椿、炎に巻かれながら死に物狂いでベンチを抜け、ベンチ裏へとたどり着く。

椿、倒れ込む。

避難していたコーチや選手らが駆け寄る。

コーチ「椿っ!」

握りしめていたお守りが椿の手のひらから落ちる。

○ネット記事

一面に以下の写真。

グラウンドの焼け跡に巨大金庫。

金庫の壁に書き殴られた以下の脅迫文。

「樁を引退させろ 「時半の男」

それに見出しが添えられて、

「灼熱のドーム球場！ 犯人による放

火！ 樁への怨恨か？！」

○勅使河原の別宅・リビング（深夜）

板倉、秋山、飯田、上原、勅使河原夫婦、

落ち着かない様子でいる。

スタッフ、やってくる。

スタッフ「焼けたフィルムの修復が完了しま

した！」

×

×

×

一同、ハイスピードカメラが捉えた超ス

ローモーションの映像を確認している。

一同「（息をのむ）」

映像には巨大金庫の壁をバットでタコ殴

りする史也の姿がバッチリ。

飯田「（驚愕し）まさかこんなことが…」

板倉「うむ。とにかくこれで犯人の面は割れた。椿君に体を張らせた甲斐があったな  
(と満足気)」

勅使河原「彼のケガの具合はどうなんですか？」

上原「幸い軽傷で済みました。現在入院中ですが、明日にでも退院できるでしょう」

のぶ子「まアよかった」

映像には狂ったように壁を殴る史也の姿。

飯田「新たな脅迫文から察するに、犯人は椿君に恨みを持つ人間のような」

秋山「しかし姿が判明したんだ。これで犯人逮捕も時間の問題でしょう」

板倉「いいか。警察にはいな」

一同「…？」

板倉「フィルムは燃えたともいっておけ」

秋山「…しかし」

板倉「上原君。元スカウトの君のことだ。ス

カウトで鳴らしたりサーチ力があれば犯人の目星をつけることなど容易いだろう」

上原「…はア」

板倉「(嗜虐的な笑みで)相手は山猿だ。檻の中にぶち込む前にたっぷりと躡をしてやる必要がある」

○病院・病室(翌日)

椿、ベッドで休んでいる。

脇で詩織がリングを向いている。

竜之介、ミニカーで遊んでいる。

竜之介「ぶーん! ドカーン!」

詩織「竜之介、もう少し静かにできないの?」

竜之介「(しゅんぼり)はい」

椿「(微笑む)」

とノックの音。

上原、入ってくる。

椿の表情が俄に険しくなる。

椿「∴詩織」

詩織「竜之介、お外いくよ」

詩織、竜之介を連れて出て行く。

上原、両手に見舞いの品を抱えている。

上原「この通りだ。ファンから君宛てに激励

の手紙や贈り物が山ほどきてるよ」

椿「…」

上原「プロ野球界のためとはいえ君には辛い役目を強いたな。オーナーからの伝言だ。少し早めのシーズンオフをとってこいのことだ」

椿「…つまり今後は僕を試合には出さないってことですか？」

上原「君の安全のためだ」

椿「…」

上原「もちろん契約のことなら心配無用だ。

今シーンの君の契約に関しては我々のほうで特別な措置を計って」

椿「(遮る) 金のことじゃない！」

上原「…」

椿「(かっとなる) オーナーのいう威信とやらのために俺たちは命がけて試合に出たんだ！　そして今度は安全のために試合には出るなという。あなたたちは選手のことを何だと思ってるんだ！」



上原「…まアそういうな。実は君にいい知らせがある。犯人の正体がわかった」

椿「…犯人が？」

上原「これを見せてくれ」

上原、懐から取り出した写真を椿に渡す。  
写真には史也の顔が映っている。

椿「(微かに眉が動く)」

上原「…どうだ？ 心当たりがあるかね」

椿「…いえ」

上原「そうか。しかしこうして鮮明に顔が映っているんだ。捕まるのは時間の問題だよ。君にはそれまで辛抱してもらおうよりない」

上原、出ていく。

椿、渡された写真をもう一度見る。

椿「(胸騒ぎがする)」

○鍋島家・居間(夜)

史也と紀子、餃子を食べている。

テレビから野球中継が流れている。

○野球中継

無観客で試合をする選手たち。

実況の声「〽時半の男による襲撃から一夜明け、東京タイタンズは急遽スタジアムを変更して本日も試合を強行。一方でチームのフロントは樫選手のシーズン欠場を発表しました。犯人の新たな脅迫内容から事件は樫選手への怨恨説の見方が強く、樫選手をチームから外したことで事実上犯人の要求に屈した形となったのではと…」

○（戻って）居間

紀子「（心配し）樫君、大丈夫かしら」

史也「（むしゃむしゃ食べている）」

紀子「ケガは大したことないってニュースでいってたけど。犯人に狙われてたんじゃ野球どころじゃないわね」

史也「（むしゃむしゃ）」

紀子、湯飲みを持って台所へ立つ。

紀子「…あんた、いい加減働いたら」

史也「∴」

紀子「椿君みたいに稼いでちょうだいとはいわないけどさ」

史也、壁の時計をちらと見る。

まもなく「時半を迎える。

史也「(呟く)春ちゃんが消えたことだし、いわれなくても働くよ」

以下、カットバック

○高級住宅街(夜・「時半」)

ストップモーションの街並み。

ストップした車や通行人。

その中をバットケースを背負った史也が闊歩する。

○ある豪邸

壁時計が「時半を指している。

史也、室内を荒らし回し、現金や宝石など金目の物を漁っている。

史也、バットを構えてフルスイング。  
豪華なインテリアが音を立てて壊れる。

○ホテル・室内

ストップモーションの室内。

椿、素振りをしたままストップしている。

時計の針が動き出す。

椿、汗を流しながら素振りを続ける。

○道（別の日の夜・ㄥ時半）

ストップモーションの景色。

史也、豆まきのように指輪やダイヤをそ

こら中にばらまきながら練り歩いている。

史也「毎度お騒がせしております。庶民の味

方、ㄥ時半の男こと鍋島史也、鍋島史也で

ございます。鍋島史也に清き一票を……」

やがて史也の姿が見えなくなると――

時が動き出す。

道ばたに散乱した指輪やダイヤを見て大

騒ぎする通行人ら。

そこへ椿が荒い息でジョギングしてくる。

○ニュース映像

原稿を読むキャスター。

キャスター「世間を騒がせている「時半の男」。

スタジアム襲撃から一転、今や現代のねず

み小僧と呼ばれています」

渋谷駅前。

時計の針がまもなく「時半を指す。

目をつぶって祈る若者たち。

ナレーター「ここ渋谷駅前では「時半になる

と「時半の男の到来を願って祈りを捧げる

人たちの姿が……」

時計の針が「時半を過ぎる。

若者ら、何も起きずにガツカリ。

ナレーター「一方で我々は「時半の男から宝

石を受け取った男への取材に成功した」

カメラの前に一人の男。

モザイクとボイスチェンジャー。

男「その日はアパートの部屋にいました。「時

半になったとき、背後でカタッと微かな物音がしたんです」

記者「物音？」

男「で、振り向くとテーブルの上に宝石がおかれていた。とびきり大きなルビーです」

男、そのルビーをカメラの前に見せる。

記者「警察に届けないとまずいのでは」

男「いやア（と言葉を濁す）」

○ある豪邸（別の日。夜・㈬時半）

ストップモーションの室内。

史也、室内のものを盗み散らかす。

○鍋島家・居間

ストップモーションの室内。

史也、台所をのぞく。

紀子、皿を拭いたままストップしている。

史也、ちゃぶ台を見下ろし、

史也「（にやりとする）」

カットバック、終わり

○鍋島家・台所

紀子、皿を拭いている。

時計が「時半を指す。

居間の方からカタッと微かな物音がする。

紀子「：？」

紀子、手をとめて居間へいく。

ちゃぶ台の上に100万円の札束がある。

紀子「(びっくりして) 史也！ ちょっと！」

史也、階段から降りてくる。

紀子「(札束を指さし) ねえ、あれ！」

史也「(わざとらしい) うわー！」

紀子「気づいたらあったの」

史也「奴だよ。うちにもきたのか」

紀子「やだ。不気味だわ。ねえ、盗まれた人

が困ってるから警察に電話して」

史也「内緒にしてたらバレないって」

紀子「ダメよ。お母さん警察に電話する」

史也「(慌てて) わかったって」

史也、冷蔵庫から缶ビールを取り出す。

史也「シラフじゃあれだから一杯やったら警察に届けてくる」

紀子「ほんと？」

史也「ほんとだって」

○同・史也の部屋

史也、パソコンで野球中継を見ている。

机の引き出しに先ほどの100万の札束が押し込まれている。

実況の声「ただいまㄥ時半を回りました。今

夜もㄥ時半の男による妨害はありませんでした。そして椿選手は本日も欠場」

史也、ビールを一气にあおる。

史也「(呟く)春ちゃんのいない野球中継は面白いなあ」

○ホテル・室内

テレビで野球中継。

実況の声「プロ野球界へのㄥ時半の男の驚異



は去り、一転して試合は平常運転を迎え…」

椿、悔しさを堪えて素振りを始める。

○勅使河原の別宅・リビング（翌日）

板倉、いかつい顔でうろろうろしている。

恐縮する秋山、飯田、上原の3人。

板倉「（怒りを露わに）山猿一匹に何を手こず  
ってるッ。5日経ったぞ。一体どうなっ  
てるんだッ！」

秋山「（飯田へ）どうなってる」

飯田「（上原へ）どうなんだ」

上原「オーナー。説明させて頂きます」

板倉「説明してくれ」

上原「現在行っている作業ですが、映像に映  
った人物を特定するというのは実際にや  
ってみるとことのほか難しいものでして」

板倉「言い訳はいい。調べはどうなってる」

上原「今回の場合ですとSNS上での探索が最  
も有力な方法となります。しかし私共のほ  
うでどれだけ調査しても犯人の知り合い

はおろか顔写真の一枚すら見つからず、犯人は本当に存在しているのかどうかも」

飯田「まるでモグラのような奴ですな」

秋山「ここはやはり警察に任せたほうが」

板倉「(ぴしゃりと) 秋山君、飯田君、本業が

忙しいのはわかるが、君たちも少しは手伝ってやってはどうかね」

秋山、飯田「…」

板倉「(歯噛みする)」

○ホテル・部屋

椿、テーブルで古いアルバムを見ている。

椿「(声を震わせ) まさか…いや…」

詩織、やってくる。

椿、とっさにアルバムを閉じる。

詩織「ねえ。お昼焼きそばでいい？ 竜之介が食べたいって」

椿「そうか」

椿、部屋を出ようとする。

詩織「どこにいくの？」

椿「走ってくる」

詩織「…犯人、まだ捕まらないの？」

椿「心配するな」

椿、出ていく。

詩織、先ほど椿が見ていたアルバムに何となく視線をやる。

詩織、テーブルにいき、そっとアルバムを開いてみる。

アルバムには高校球児の頃の椿の写真。

甲子園で打席に立つ勇姿や仲間とふざけあっている姿が映っている。

詩織「（微笑む）」

詩織、ページを手繰っていくと、あるページに一枚の写真が挟まっている。

犯人の顔写真だ。

詩織「…？」

同じページにリトルリーグ時代の写真。

椿と肩を並べて笑う史也の姿。

犯人の顔にどことなくその少年の面影が感じられる。

詩織「(写真を見比べて) …」

○河原

史也、鼻歌混じりに自転車を漕いでいる。

○鍋島家・玄関

史也、帰ってくる。

土間に見慣れない靴がある。

史也「…?」

○同・居間

史也、やってくる。

紀子、妙にそわそわしている。

紀子「史也…」

史也「…?」

史也の視線の先にちゃぶ台の前で正座する男の後ろ姿。

男、振り向くと――椿である。

史也と椿の視線がぶつかる。

史也「(絶句する)」

椿「(息をのむ) …ナベちゃん…なのか」

史也、とっさに玄関へと引き返す。

椿「！」

椿、立ち上がると急いで後を追う。

○同・家の前

史也、猛スピードで飛び出してくる。

○道

史也、猛ダッシュで逃げる。

椿、猛追する。

○河原の土手

へばった史也、椿に捕まる。

二人、取っ組み合いになる。

二人とも土手から転げ落ちる。

○河川敷

すぐそばに川が流れている。

遠くに野球グラウンドが見える。

史也、へばって動けない。

椿、造作なく立ち上がる。

椿「(史也を見下ろし)本当にナベちゃんなの

か：奴の：犯人の正体は」

史也「(息が苦しい)」

椿「ナベちゃん。答えてくれ」

史也「(息絶え絶えで)その呼び方、懐かしい

よ。春ちゃんは俺のことなんか覚えてない

と思っただけど」

椿「：犯人の写真を見てナベちゃんの面影が

よぎった。でもそんなはずはないと信じた。

それを確かめにここに来た」

史也「：」

椿「友達だった」

史也「：」

椿「なぜだ。なぜなんだ！」

史也、腕を上げて腕時計をかざす。

史也「この腕時計だよ」

椿「…？」

史也「これを身につけてると、時半になれば

どんなことでもできる」

○勅使河原の別宅・大広間

飯田、駆け込んでくる。

飯田「犯人の正体がわかりましたッ！」

板倉、思わずソファから立ち上がる。

秋山、上原、のぶ子、集まってくる。

飯田「椿君の奥さんである詩織さんから情報提供があり、取り急ぎ我々の方で調査した

結果、まず間違いありません」

板倉「そうか。わかったのか」

秋山「早くオーナーに教えて差し上げろ」

飯田「(メモを広げて読む)鍋島史也。30歳。

椿君とは少年野球時代のチームメイトでした。彼を知る少年野球の元コーチに電話で話を聞いたところ、彼は幼い頃に父親と死別しており、現在も母親と調布市にある実家に住んでいるのではないかとのことです。少年野球時代は投手として先発を任せられ、9年生のときには東京大会で…」

板倉「(遮って)ご苦労。本題に入ろう」

飯田「(恐縮してメモをしまう)」

板倉「で、どうする？ 犯人を捕まえるには

実行役が必要だが(と一同を見回す)」

秋山、飯田、上原「(黙り込む)」

勅使河原の声「私にお任せください」

勅使河原、暖炉のそばに寄りかかり、ラ

イフルを磨いている。

ライフルが不気味な光を放っている。

板倉「やってくれますか(と満足げ)」

勅使河原「ええ」

のぶ子「(勅使河原へ)あなた、私もやります」

勅使河原「何をいう。お前じゃ役に立たん」

のぶ子「私にもダミアンハーストの恨みがあるんです」

勅使河原「あんな水玉の絵がなんだ。まるで

文房具屋で売ってるシールじゃないか」

のぶ子「(むっと)あなたにはあの絵の価値が

わからないんです」

板倉「まアまア。奥さんだっいてもたって



もいられないんでしょう。協力してくれま  
すかな？」

のぶ子「(嬉しい) はい」

板倉「では早速とりかかってもらおうとしよう。

多少手荒なマネをしても構わない。捕まえ

次第速やかにここへ連れてくるように」

勅使河原、のぶ子「はい！」

○河川敷

史也、土まみれになった体を起こす。

史也「春ちゃんを狙ったのはたまたまで、恨

みがあるとかじゃない」

椿「…」

史也「誤解なんだ。板倉のせいでき…」

椿「誤解だと？ ナベちゃんのせいで俺は死

にかけたんだぞ！」

史也「…ごめん」

椿「謝って済むような問題じゃない」

史也「…うん」

史也、観念したように立ち上がる。

史也「まさか春ちゃんとまた会えるとは思ってなかった。だからもう捕まっても後悔はないよ」

史也、遠くに見えるグラウンドを見渡す。

史也「リトルリーグ時代、あそこで練習した。

あの時が人生で一番楽しかった。結局野球は続かなかったから」

椿「…」

史也「覚えてる？ 俺がイジメられて物置に閉じこめられた時のこと。春ちゃんが奴らをフルボッコにしてさ。物置から出してくれたんだ。だから春ちゃんには感謝しかないよ。どうかしてたんだ」

椿「…」

椿、史也の腕時計を見やる。

椿「…それを川に捨てるんだ」

史也「…？」

椿「それで終わりだ。二度とナベちゃんは悪さをできない。そして俺も二度とナベちゃんを思い出すことはないだろう」

史也「…わかった」

史也、ゆっくりと川へと歩いていく。

史也、腕時計を外す。

史也「…」

が、史也、腕時計を捨てずに川の中へ進もうとする。

椿「(叫ぶ) ナベちゃん！」

史也「…」

椿「そこから一步でも動けば俺は野球と家族を守るためにをナベちゃんを売るぞ！」

史也、構わず逃げる。

史也、川の水に足をとられながら反対の岸を目がけてがむしやらに進む。

椿「(呆然と史也を見つめ)…」

○裏通り(夕)

人気のない道。

ずぶ濡れの史也、しゃがみ込んで建物の影に身を潜めている。

○勅使河原の別宅・大広間

時計の針が午後5時を回る。

板倉、落ち着きなくうろついている。

と携帯の着信音が鳴る。

板倉「(思わず反応する)」

上原の携帯だ。

上原「(恐縮する) すみません」

板倉「…」

上原「(電話に出て) もしもし。君か…え？」

板倉、上原を見る。

板倉「どうした？」

上原「いえ、椿君からの電話でして、先ほど

犯人の男と接触したとかで」

板倉、上原から携帯を奪い取る。

板倉「どういうことだ?!」

○鍋島家・家の前

勅使河原とのぶ子、物影から家の様子を

うかがっている。

ロープを持った勅使河原、やる気満々。

愛犬のマロンちゃんがのぶ子の胸に抱かれて  
れている。

勅使河原「(苦々しく)何も犬まで連れてこな  
くたっていいだろう」

のぶ子「いざという時はこの子も役に立つわ」

○カフェ

椿、携帯で話している。

板倉の声「なるほど。腕時計というのは新し  
い収穫だ。しかしだ、君の細君から情報を  
受けて我々の方でも奴を捕まえるべく動  
いていたところだ」

椿「詩織が…?」

板倉の声「君が余計なことをしてくれたおか  
げで今まさに成し得んとしていた奴との  
決着が遠のいたぞ」

椿「…」

板倉の声「それでどうするつもりなんだ？」

椿「…彼を探します」

板倉の声「どうやって?」

椿「(時計を見)「時半になるまでは近くにいるはず。それまでに何とかか…」」

板倉の声「見つからなかったら？」

椿「もう一度彼の家にいきます。彼の母親に彼を説得するように頼んでみようかと」

板倉の声「呆れたよ。君は情にほだされて犯人を逃がし自分の首を絞める失態を演じた。奴を野放しにして苦しむのは君自身だぞ。私は忙しいのでこれで切らせてもらう  
(と電話を切る)」

椿「…」

○勅使河原の別宅・大広間

板倉、携帯を取り出し電話をかける。

板倉「私です。今どこに？」

○鍋島家・家の前

勅使河原、のぶ子、見張っている。

勅使河原「奴の家の前で待ち伏せしています」

板倉の声「そこにいてもムダでしょう。奴は

今多摩川近辺にいる」

○勅使河原の別宅・大広間

板倉「そう遠くに逃げていないはずだ。是か  
非でも獲物を捕らえて頂きたい」

○道（夜）

椿、辺りを見回している。

椿、時計をみる。

すでにの時半を回っている。

○別の道

黒塗りの高級車がゆっくり巡回している。

車内に勅使河原、のぶ子、マロンちゃん。

勅使河原ら、周囲を丹念に見渡している。

○裏通り

史也、建物の間に身を潜めている。

と正面に黒塗りの車。

車から犬の鳴き声が響く。

史也「(ビビる)」

○車内

窓から顔を出したマロンちゃん、史也を見てやたらめったら吠えまくる。

勅使河原「ん？」

勅使河原、車を停める。

のぶ子「ちょっと。何？ どうしたの？」

○裏通り

史也「(犬を見て) …」

○(フラッシュバック) 勅使河原宅

史也、盗んだ絵を脇に抱えている。

床でマロンちゃんが停止している。

史也、マロンちゃんに顔を近づける。

史也「ワンワンワンッ！ (とふざける)」

○裏通り

史也「…」



勅使河原の声「奴だ！」

勅使河原、車から飛び出てくる。

史也、猛ダツシユで逃げる。

勅使河原、機敏に追う。

史也、逃げた先が行き止まり。

史也、追いつめられる。

勅使河原、史也に飛びかかる。

史也、間一髪交わす。

史也、来た道を猛ダツシユで引き返す。

勅使河原「しまった！」

○車の前

史也、建物の間から出てくる。

のぶ子、身を震わせながら史也の前に立

ちはだかる。

史也、のぶ子を突き飛ばし逃げてゆく。

尻餅をつくのぶ子。

のぶ子「(悲鳴)誰かぁ！ その男ッ！ ㄥ時

半の男よ！ 捕まえてー！ー！！！」

○勅使河原の別宅・大広間

板倉の怒号が室内に響く。

板倉「(携帯に向かって)馬鹿タレが！ みす  
みす取り逃がす奴があるか！」

板倉、鼻息荒く電話を切る。

板倉「何て奴らだ。皆して私の足を引っ張り  
たいらしい」

秋山、飯田、上原、萎縮している。

秋山「(遠慮がちに)しかしこれで警察にも奴  
の正体が知れ渡ることになりました。とな  
ると我々にできることはもう…」

○道(夜、時半)

ストップモーションの風景。

自転車を漕ぐお巡りが停止している。

史也、すぐ近くの物影から出てくる。

何とか逃げ切ったようだ。

○鍋島家・居間(夜、時半)

史也、やってくる。

紀子、ちゃぶ台でうたた寝したまま停止  
している。

史也「(首をひねる)おかしいな。完全犯罪だ  
と思っただけだ」

史也、台所へいき、冷蔵庫からビールを  
取り出す。

史也、ビールを一気におおる。

史也「(紀子へ)でことで俺しばらく家空ける  
ことになったから。うん。」時半になつた  
ら帰ってくるわ」

× × ×

史也、荷物片手に階段から下りてくる。

玄関へ向かう史也、ふと足をとめる。

史也、紀子の後ろ姿を見つめる。

史也「(ぼつりと)…ごめんな。こんな息子で」

史也、居間に戻り、紀子の丸まった背中  
にタオルケットをかけてやると部屋から  
出ていく。

○料亭(一週間後・夕)

板倉、江藤、椿、席を囲んでいる。

江藤、じっと目を閉じている。

板倉、煙草を吸っている。

江藤「目を開ける」いかにも君らしい作戦だ」

板倉「∴」

江藤「それで勝算は？」

板倉「一割∴あるいはそれ以下」

江藤「君にしては弱気な数字じゃないか」

板倉「あとは運だ。あれから一週間。警察が

奴を捕らえられない以上、これが最後の賭

けだ。やってみる価値はあるぞ」

江藤「∴（考える）」

板倉「じいさん。やるか？」

江藤「君の言葉を借りれば、やってみる価値

はあるのだろうか」

板倉「よし」

板倉、灰皿で煙草をもみけす。

板倉「作戦が成功したとして、警察に手柄の

横取りはさせない。警察の手に渡すのはこ

との全てが済んだあとだ。奴の最後の「時

半は俺がもらう」

江藤「…いいだろう」

板倉「(椿へ)というわけだ。後は君次第だ」

椿「…」

板倉「どうなんだね。奴とは旧友だったか知らないが、やられっぱなしで君はいいのか」

椿「…」

板倉「君のセンチメンタルな友情物語のせいで被害者が泣き寝入りすることになっても構わないというのかね」

椿「いえ、そんなことは…」

板倉「じゃあどんなことを思っている？ 私の作戦に対する君の意見を聞こうじゃないか」

椿、答えられずにいる。

板倉「さア覚悟を決めたまえ。君も勝負の世界で生きる人間なら、勝つことの意味の大きさがわかるだろう」

椿「…」

板倉「このままでどうする。日本を出て国外

で野球をする気にいるのか。アメリカか、韓国か、あるいはオランダか。いやどうだろうな。偏執狂の奴のことだ。君の向かうところは地の果てまで追いかけてくるぞ」

椿「…」

板倉「奴を捕らえない限り君は永久に野球ができない」

椿、板倉をじっと見据える。

椿「…やります」

板倉「(眼が光る)」

椿「(怒りを滲ませ)しかしあなたの復讐欲を満たすためではない。俺は俺自身のために、野球を取り戻すためにアイツをこの手で捕まえてみせます」

板倉「よろしい。そうと決まれば物事は急げだ。私の持ちうる全てのコネクションを駆使して犯人に臨まねばならん」

板倉、立ち上がる。

板倉「(張り切る)さア、忙しくなるぞ」

○ネットカフェ・個室（数日後・夕）

史也、スマホでニュース記事を見ている。  
史也、ある配信映像を見て、手がとまる。

○神宮球場・中

無観客の中、椿、練習している。

実況の声「ここ神宮球場からお送りしております。なんと球場には「時半の男」による襲撃以来シーズン欠場を発表していた椿選手の手姿があります」

○ネットカフェ・個室

史也「（歯噛みする）何で春ちゃんが…」

○神宮球場・グラウンド

椿、ホームランを放つ。

実況の声「入ったア！ 欠場からおよそ二週間！ 復活を告げる一発だア！」

○タクシー車内

史也、スマホに映し出される野球中継に釘付けになっている。

○神宮球場近く

史也、タクシーから降りる。

史也、草むらに身を隠す。

○神宮球場・グラウンド

スクリーンの時計が「時15分を指す。

実況の声「時刻は現在「時15分を回ったところ。まもなく「時半を迎えます」

審判、タイムを告げる。

両チームの選手ら、ベンチへ引き上げる。

バックヤードから例の巨大金庫がフォー

クリフトに乗って登場する。

実況の声「おや。これは…:またしても同じ作戦に打って出るのでしょうか」

と金庫がバランスを崩して地面に倒れる。

実況の声「あっと、倒れてしまった！」

スタッフ、金庫を慌てて起こそうとする



が、ダメ。

刻一刻と、時半が近づく。

○近くの草むら

史也、ジリジリしている。

○神宮球場・グラウンド

倒れている金庫。

スタッフら、起こすのに難航している。

椿、金庫の前でなすすべがなく立ち尽くしている。

「時半が間近に迫る。」

スタジアムにコーチらの怒号が響く。

「椿、避難しろ！」

「間に合わない！ ライトを消せ！」

スタンドの照明が一斉に消される。

球場内がうっすらと闇に包まれる。

実況の声「ああッ！ なんと……（声が途切れる）」

スクリーンの時計が「時半を指す。」

○近くの草むら

スマホ画面内の動きがピタリと止まる。

史也、勢いよく駆け出す。

○神宮球場・グラウンド

史也、薄暗いグラウンドにやってくる。

史也、停止している樁の背後に立つ。

史也「ダメだよ。試合に出ちゃ。春ちゃんが  
いると目障りなんだよ…」

樁「(反応なし)」

史也、落ちていたバットを拾う。

史也「こんなもん作りやがってさ」

史也、金庫の壁をバットで殴り始める。

以下、史也の独り台詞が続く。

史也「(苛立つ)殺そうと思えばいつだって殺  
せる。誰でもだ。誰だって殺せる。でもそ  
れをしないのは俺が正しい人間だからだ」

史也「何が自警団だ。普段うま味を独り占め  
してるくせに、ちよつとつまみ食いしたら

ピーピー泣き言並べてさ」

史也「俺のほうか世の中のおかしいことをた  
くさん知ってる。でもそれを飲み込んで、  
ぐっと堪えるのが大人ってもんだろ」

と殴った弾みでバットが折れる。

史也、折れたバットを投げ捨てる。

史也「（ふっと笑う）ホームラン一本につき  
1250万か…」

史也、また樁の背中を見る。

史也「いいよ。春ちゃんは天才だ。いくらも  
らおうといい。それはいい。だけど、この  
差は何だ」

史也「肉まん並べると、ボールかっ飛ばす  
のとで、何でここまでの差が出るんだ。そ  
れじゃまるでお前の5年分の時間は春ちゃ  
んのホームラン一本分の価値もないとい  
われてるようなものじゃないか」

史也、別のバットを拾う。

史也「春ちゃんが羨ましいよ。いいとこ住ん  
でいい車乗って、美人の奥さんもらって子

供作って。危険が迫ればいつでも両親のもとに逃げ込める」

史也「俺なんかひどいよ。貧乏臭い家に住んで、チャリコン乗ってさ。薄暗い工場で毎日ドブネズミみたいに働かされるんだ。金のために黙々と働いたところでせいぜい時給20円アップが関の山。1日200円ぽっちじゃ、仕事終わりに缶コーヒートの一本でも買ったならそれきり、後に何も残らないじゃないかッ!!（とわめき散らす）」

史也、バットを手に椿に近づく。

史也「…?時半になると春ちゃんが狙われるのは、当たり前なんだよッ!」

史也、椿の後頭部へバットを振り下ろす。

その瞬間――

スタンドの照明が一斉につく。

史也、眩しさに思わず手が止まる。

板倉の声「そうか。そうやって毎晩惨めったらしく独演会を打ってたってわけか」

史也「?!」

椿、動き出す。

椿、ゆっくりと振り返ると物悲しい目で史也を見下ろす。

史也「（驚く）なんで…」

板倉、バックヤードからやってくる。

板倉、史也の前に立つ。

板倉「貴様の言葉からは悪臭がする。腸が腐ってウジが沸いてる」

史也「…」

板倉「どうした。急に無口になったぞ」

史也、呆然としている。

板倉「まあいい。滑稽なショーを見せてもらった礼に一つ種明かしをしてやろう」

史也「…」

板倉「貴様の腕時計の力は椿君から聞いている。〳時半になると動き出すとかいう腕時計を見てみる」

史也、腕時計を見る。

史也、ハッとする。

針が〳時半を指したまま止まっている。

史也「なんで…」

板倉「(自分の腕時計を見る)当然だ。現在の時刻は〆時10分だからな」

史也「そんなはずは…」

史也、スクリーンの時計を見上げる。

「時半でピタリと止まっている。」

板倉「もっとも球場内の時計に関しては少し細工したかな」

史也「…」

板倉「わからないか？ この試合は貴様をおびき出すために行われたものだ。つまり放送されていたのは偽の野球中継。そして中継内において一分を45秒としてカウントして時計の針を進めた。そうすることで10分で10分。2時間で30分の時間を実際よりも早めることができる」

史也「…」

板倉「〆時半を前倒しにすること。それがこの野球中継の目的だ。そのためにマスコミ、選手、プロ野球関係者が一丸となって大芝

居を打ったというわけだ」

史也「…」

板倉「どうした？ 何を黙っている」

史也「（口ごもる）そんなはずは…俺が本当の時刻を見たらどうする？ そもそも俺がここにやってくるとは…」

板倉「むろん勝負に運は付き物だ。しかし貴様はやってきた。椿君が試合に出ていることを知るや否や貴様は全国どこにしようと飛び込んでくる。そしてこの球場近くに身を潜める。ネット配信かあるいはラジオで試合を一心に見る。椿君が隠れ損ねたを見て、しめたと思う。貴様は椿君にジェラシーを抱くあまりに目が曇った。だから時計ごときが読めない」

史也「…」

板倉「そしてこの作戦を成功させるには球場周辺を封鎖する必要がある。当然警察に協力を仰いだ。貴様は完全に包囲されている」

○同・外

待機する機動隊。

○同・グラウンド

板倉「そうやって私の力とコネクションによって演出された。後半という空間に貴様はまだまとハマったんだ」

史也、きよろきよろ周りを見渡す。

屈強な選手たちが逃げ道を塞いでいる。

史也、観念したようにうなだれる。

板倉「ゲームセット。我々の勝ちだ」

○神宮球場・ロッカールーム

史也、柱に縛り付けられている。

史也、テーピングで全身を縛られており、身動きがとれない。

板倉、勅使河原、秋山、飯田、上原が取り囲み、輪から離れたところに椿の姿。

勅使河原の握るライフルが不気味さを放っている。



勅使河原「しかし腕時計の力を知りながらな  
ぜ奴からそれを取り上げないのです？」

史也の手首には依然として腕時計がつけ  
られている。

板倉「まア見てなさい」

板倉、バットを手にする。

板倉、史也の体に強烈な一撃を浴びせる。

史也「(激しく呻く)」

板倉、何度も、執拗に史也を殴りつける。

椿、見ていられない。

史也、苦悶しながらも、後ろ手に縛られ  
た状態で柱の出っ張りにテーピングをこ  
すりつけ、解こうとしている。

板倉「(一息つき、椿へ)今回の件で君は最大  
の被害者だ。一発くらい入れてもバチはあ  
たるまい」

板倉、椿にバットを差し出す。

椿、徐に受け取ると史也の前に立つ。

椿「…ナベちゃん。悲しいよ」

史也、動かしていた手が思わずとまる。

椿、バットを地面へ放り捨てる。

椿「ナベちゃんには野球の素質があった。でもそれを周りのせいにして活かそうとせず、自らの手でドブの中に捨てたんだ」

史也「…」

椿「俺の人生は俺自身の血と汗で掴み取ったものだぞ。ナベちゃんは何をしてきた？ 素振りを何回やった？ 投げ込みは？ 人一倍の努力はしたか？ ナベちゃんは何もやってこなかったんだ！」

史也「…恵まれて生まれてきた春ちゃんにはそうじゃない奴の気持ちなんかわからないよ」

椿「その腕時計はどうだ？」

史也「…」

椿「そんな力を手にしたなら、犯罪なんて当てつけみたいな形じゃなく、もっとひたむきに、もっと自分自身のためにその力を使えばいいんだ。違うかナベちゃん！」

史也「…いったろ。春ちゃんには俺の気持ち

なんかわからないって」

椿「(寂しげに)それならもういうことはない」

史也「春ちゃんと俺とじゃ、最初から話すこ

となんか何もなかったんだよ」

椿「…」

勅使河原、ライフルを壁に立てかけ、バ

ットを拾う。

勅使河原「どうしますか？」

板倉「やれ」

勅使河原、バットで史也の体を殴る。

史也、鼻血を出す。

椿「(堪えかねて)もう十分でしょう!」

板倉「もっとだ」

勅使河原、バットを振り下ろす。

史也「(呻く)」

板倉「もっと血を流せ。お前が流したワイン

の血はこんなものじゃないぞ」

壁時計の針が「時半を指そうとしている。

秋山「(不安げに)そろそろ時間になりますか」

板倉「うむ」

板倉、血塗れの史也の顔を見下ろす。

板倉「これから貴様の最後の「時半を見届け  
てやる。何しろ」秒で24時間分の苦痛だ。

見物じゃないか」

勅使河原「(合点してにやりと笑う)」

と、史也、せき込みながら笑い出す。

板倉「…？」

史也「…板倉。ゲームはまだ終わってない」

板倉「何をいってる？」

史也の両手を縛り付けていたテーピング  
が解かれている。

勅使河原「(気づく)いかん！ 両手のテーピ  
ングが外れてる！」

一同、仰天する。

史也「延長戦ッ。俺のサヨナラ勝ちだッ(と  
叫ぶ)」

飯田、上原、慌てて史也の手を縛り直す。

史也、必死に抵抗する。

板倉「何をしてるッ！ 時計だ！ 腕時計を  
外せッ！」

上原、腕時計を剥がそうとするが、

上原「外れません！」

板倉、壁に立てかけられたライフルを手に取る。

板倉、ライフルを史也に向ける。

椿「(叫ぶ) やめろッ!!」

板倉、構わず引き金を引く。

ライフルが火を吹いた瞬間――

時計が半時を指す。

史也以外の一同、ストップする。

史也の両手は元通りに縛られており、身

動きがとれない。

史也「(もがく)」

史也の正面から亀のように緩慢にしかし

確実に迫ってくる鉛の弾丸。

史也「(必死にもがく)」

椿、絶叫したまま停止している。

史也「(顔が歪む) 春ちゃん…春ちゃん! 助

けて!!」

弾丸が史也の目の前まで迫る。

史也「!!!」

史也の額に鉛の冷たい感触が当たる。  
弾丸が額にゆっくりめり込んでゆく。

史也「ああああああッーッー」

史也、小刻みに震え出す。

史也「(意識を混濁させ) : : かつとばせ、か  
とばせ : : ホームラン : : 」

○野球場・グラウンド(回想)

フェンスに「少年野球東京大会決勝」の  
垂れ幕。

マウンドに史也。

史也、好投し、打者を三振にしとめる。  
攻守交代で、椿とハイタッチしてベンチ  
へ駆けてゆく。

椿「ナベちゃんナイスピッチ!」

史也「(にっこり笑う)」

×

×

×

打席に椿。

ベンチの史也、大声で、

史也「かつ飛ばせ！ 春ちゃんッ！」

椿、フルスイングする。

打球が伸び、ライトの頭上を越えてホームランとなる。

ベースを回る椿。

椿、史也へガッツポーズ。

× × ×

スコアボードに「6回裏、4対3」の表示。

あと一人打ち取れば優勝の場面。

ベンチから「あと一球！」と声援。

史也、マウンドで大きく息を吸う。

緊張でボールを持つ手が震えている。

史也、サードを守る椿を見る。

椿「(力強く頷く)」

史也「(頷く)」

史也、肩の力がすっと抜ける。

思い切り腕を振り上げ、ボールを投げる。

バッター、バットを振る。

打球が打ち上がる。

ピッチャーフライだ。

椿「ナベちゃんッ！」

史也「(グラブを構え) オーライ！ オーライ！」

太陽の光線に照らされたボールが、きらきら輝きながら史也の頭上へ落ちてくる。やがてボールが弾丸に変わって――

○(戻って) ロッカールーム

時が動き出す。

史也、頭を打ち抜かれて絶命している。

一同、静まり返る。

椿「(顔をそむける)」

板倉「…仕方なかった」

○鍋島家・居間(2ヶ月後・夜)

開いた窓。

カーテンがひらひら揺れている。

テレビから野球中継が流れている。

打席には椿。

椿、フルスイングでかつ飛ばす。



実況の声「打ったアーーー！ ライトスタ

ド一直線！！ ホームラン！！」

紀子、リモコンでテレビを消す。

紀子、重たそうに腰をあげ、台所へ立つ。

× × ×

静寂に包まれた家の中。

紀子、背中を丸めて茶碗を拭いている。

壁時計の針が「時半を指す。

その時――

紀子の背後でカタツと物音が聞こえる。

紀子「(ハッとする)」

紀子、振り返り、居間を見る。

ひらひらと揺れるカーテン。

風だ。

風に揺られて窓がカタツと音を鳴らす。

風がやみ、室内にまた静寂が訪れる。

そこに史也の姿があるはずもなく――

紀子「(寂しく微笑む)」

(完)